



第20回空間デザインコンペティション

立ち現れる境界

見えないガラスを用いる
見えないガラスと呼ばれるガラスにも、実は見える部分がある事に気がついた。
ガラス一枚にも断面が存在している。
それはガラスの切断面であり、小口である。

建築する事で自然を排除しないといけなからこそ
その建築を建てるという根源的な問題から自然と対応する方法としての建築を提示したい。

森の中に、木々をさけるように、人のための場所を境界づけながら
森の秩序と対応するように見えないガラスによって壁を構築する

その見えないという性質によって、森にはガラスの小口が唯一、森の中の木々のように乱立するのみであり
人の生活する家具のみが姿を現す。

見えないという状態から、ひとたび人の生活が入る事によって
料理のあたたかみや香り、浴室の湯気といった、湿度や気温の変化によって生じる結露といったものが空間になり始める。

空間が現れては消える刹那的な現象をもった建築

ガラスというものが建築の中でも脇役であるからこそ、その脇役らしいあり方によって
自然の秩序と対応する建築をここでは考えた。

